

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践

行實鉄平¹⁾ 小田切康彦¹⁾ 岡久玲子²⁾ 川瀬和也³⁾ (司会)

1) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

2) 徳島大学大学院医師薬学研究部

3) 徳島大学総合教育センター

1. 本シンポジウムの主旨

(徳島大学総合教育センター 川瀬和也)

アクティブ・ラーニングは、大学における伝統的な教授方法であった、一方向的な講義による知識伝達に代わる教授方法として注目を集めている。徳島大学は、文部科学省が推進する「大学教育再生加速プログラム (AP)」のうち、テーマ I 「アクティブ・ラーニング」の取り組みに選定され、「学生と教員が共に成長する「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」を軸に、アクティブ・ラーニングの手法を用いた教育の推進を行っている。本学の AP の取り組みは、「鉄は熱いうちに打て」(SIH : Strike while the Iron is Hot) の精神に則り、反転授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域早期体験等によるリフレクションを基盤としたアクティブ・ラーニングの体験を通して、学生と教員が共に学び合い成長する教育プログラムである「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」を、初年次に導入するとともに、学年進行に伴い、アクティブ・ラーニングの実質化を学士課程全般に浸透させていくというものである。本シンポジウムは、AP の取り組みの一環として、本年度より初年次教育プログラムとして導入された「SIH 道場」でのアクティブ・ラーニングの実践を専門教育にも波及・浸透させることを目的としている。

また、本シンポジウムは、T-SPOD ラウンドテーブルと合同で実施される。T-SPOD ラウンドテーブルは、徳島県下の FD ネットワーク (T-SPOD) 加盟校における FD 活動の成果と教育実践の先駆的な取り組みを共有し、高等教育の質的向上に向けた努力の成果を確認するためのものである。今回は、ラウンドテーブルのテーマを「アクティ

ブ・ラーニングの取り組み」とし、本学 AP と目的が一致していることから、合同で実施する。

一口に「アクティブ・ラーニング」と言っても、そこには様々な教授・学習方法が含まれる。徳島大学では、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学習を促進させる双方向の教授・学修のこと」と定義し、その導入を推進している。このような多様な教授・学修方法を含むアクティブ・ラーニングを実際に授業に取り入れるためには、他の教員の実践を知り、その成果を共有し、またそれをもとに、各教員が自らの授業においてどのような形での実践が可能かを考え、相互に意見を交換することが重要である。

以上の観点から、AP シンポジウムとラウンドテーブルでは、徳島大学より 3 名、また T-SPOD 加盟校の阿南工業高等専門学校より 1 名の教員が提題者となり、授業実践の事例を発表することとする。また、この発表をもとに、意見交換を行う。これを通じて、「自分の授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるにはどうすればよいか？」という観点から、フロアも含めた参加者一人一人が、発表された事例について考えられるようなシンポジウムを実施したい。

以下では、徳島大学に所属する 3 名の教員の提題内容について、簡単に紹介する。なお、T-SPOD より参加する教員の提題内容については、「ラウンドテーブル」として、本抄録に別途掲載している。

2. プロサッカーチームを活用した実践事例 (徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 行實鉄平)

本授業は、プロサッカーチーム(徳島ヴォルティス)での体験学習(試合運営サポート活動)を通して「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を養うことを目的としたもので、今回、その学習をより深く確実なものにしていくために、eラーニングやループリックといった学習ツールの活用やアクティブ・ラーニングの観点を意識した授業展開に挑戦した実践事例である。

本授業の履修者は、人文科学系学生 28 名(1年生 15 名、3 年生 13 名)。体験学習は、チームの試合運営サポート活動を 8 グループ(3~4 人)に分かれて 3 段階構成(①ホップ:業務内容を知る、②ステップ:接客対応を知る、③ジャンプ:企画運営にチャレンジする)で実施した。また、この体験活動の前後には、教員やチームスタッフが体験学習の充実およびリフレクション時の概念化に必要な内容に関する講義を行った。さらに、②と③の間にはグループワークやプレゼンの機会を取り入れ、学生同士の共同学習を促した。

3. アクティブ・ラーニングを通じた政策コンペティションの実践

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 小田切康彦)

本報告は、徳島大学総合科学部の専門科目「公共政策学 I」において導入したコンペティション授業について取り上げる。当授業は、社会問題の解決策である公共政策の実態について理解することを目的としたものである。この授業の中で、受講学生がコンペを通じて実際に徳島県へ政策提言を行うという取り組みを実施した。具体的には、まず、受講学生のグループ分けを行い、徳島県が意見募集を行った県の総合計画・ビジョン案について検討した。続いて、グループごとに意見の発表を行い、全体で共有した。そして、提案された意見の中から実現可能性のあるものを抽出し、政策提言として県へ提出した。このコンペは、討議を通じて実際の社会とのつながりを体験す

るものであり、受講学生の授業へのモチベーション、内容理解の向上等に寄与したと考えられる。

4. 職場巡視体験演習を通じた看護大学生の学び (徳島大学大学院医歯薬学研究部 岡久玲子)

看護学専攻 3 年生を対象とした専門科目『産業保健・看護論』の「職場巡視」の單元において、講義とその後のグループ体験演習を組み合わせた授業を実施し、学生の学びについて検討したので報告する。本単元の到達目標は、「職場巡視」の意義・目的、方法について理解することであり、まず、講義形式で、「職場巡視」の意義・目的および方法について教授し(1 コマ 60 分、事例活用)、翌週、グループによる職場巡視体験演習を行った。学生はグループごとに指定された場所(学内)で職場巡視を行い、よい点はどこか、安全・衛生等に問題はないか、ポイントを話し合いながら記録用紙にメモをとった。その後、教室に戻り、各グループの代表者が気づいた点を発表し、教員は、一つひとつの発表ごとにフィードバックを行った(手順の説明 5 分、職場巡視 25 分、記録の整理・発表者の確定 10 分、学生による発表 20 分)。グループごとに異なる気づきがあり、全体で共有することで、多角的視点から見ることや他者の多様な感じ方から学ぶ姿勢を醸成した。また、講義の後に体験学習させることで、学んだ知識に基づき主体的に考え、理解を深めることができたと考える。